

コガネムシに関する知見 (1)

石田 正明

Notes on the Lamellicornia (1)

1. On the *Proagopertha ohbayashii* NOMURA, 1965
2. On the Genus *Oxyctonia* of Tsushima Island.

By Masaaki ISIDA

Miyamae 3-23-5, Suginami-ku, Tokyo Pref. 168

1. フタモンコガネの記録

フタモンコガネ *Proagopertha ohbayashii* NOMURA は、1965年、野村鎮氏により沖縄本島から新種として記載されたコガネムシであるが、原記載以来、追加記録がないようなので、筆者の手もとの標本により新産地を記録しておきたい。

- 1 ♂, 沖縄本島伊湯岳, 1962, viii, 3 (図1)
- 1 ♂, 沖縄本島比地川周辺, 1963, vii, 25 (図2)
- 1 ♀, 沖縄本島伊湯岳, 1961, vii, 26 (図3)

この3標本はいずれも知念嶺一氏より恵与されたもので、採集者は地元の高校生とのことである。これらの同定にあたっては原著者の野村先生に検視していただいた。

原記載によれば、本種は沖縄本島よなは岳にて、1964年7月24日、大林延夫氏の採集された1♂1♀を基本標本として新種の提称がなされている。原産地よなは岳と、今回筆者の報告した新産地とは、いずれも沖縄本島北部に位置するところで、特によなは岳と伊湯岳とは峠続きの山であるから、新産地の報告といってもそれ程新規なものではない。

さらに、各標本の採集年月日を比較してみると、いずれもほぼ同じ時期であるので、本種の成虫の出現期は、7月下旬から8月上旬にあるとみてよからう。

本種はそれほど稀種とは思われないのに記載以後記録・報告があまりないのは、過去図鑑などに図示されたこ

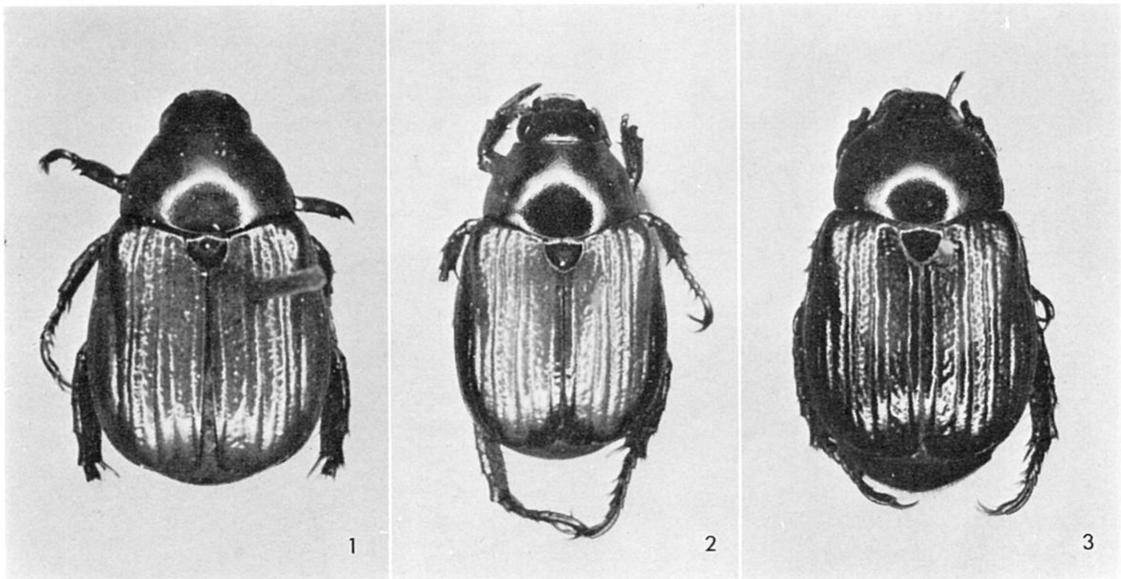


Fig. 1~3 フタモンコガネ 1. 沖縄本島伊湯岳産 2. 沖縄本島比地川産 3. 沖縄本島伊湯岳産

とがないことや、原記載が英文のみであるために普及性に多少の難があることなどが原因と思われる。そこで以下に、筆者の所有標本に基いて、本種の再記載を記し、同好の士の便に供したい。

***Proagopertha ohbayashii* NOMURA** フタモンコガネ

(Ent. Rev. of Japan, XVIII(1), pp. 6~7, 1965)

体は長卵形。背面はふくらむ。光沢あり。上面は無毛。下面は長毛をもつ。

頭：頭楯は台形で幅は長さの2倍、側縁はなめらかに前方に円まり、前縁角は円い。前・側縁は上反する。上面は密にややしわ状にあらく点刻される。前頭会線は細くて明瞭。前頭は頭楯とほぼ同様な点刻をもつ。後頭はやや疎に点刻され、頭頂には点刻を欠く部分があることもあり、特にそこにたてのやや深いみぞをもつこともある。触角は9節、片状部は3節で、♂では柄部より長く♀では短い。

前胸背：長さより幅広い。側縁はふちどられ、数本の長毛を列生する。側縁の後半部はほぼ直線であるが、中央部付近でゆるく前方にせばまり、前縁角の直前で波曲する。前縁角はとがる。前縁はふちどられ、中央部はほぼ直線状。後縁角は鈍角で、ふちどられるが、後縁中央部はひろくふちどりを欠く。上面は両側および前縁部に頭部とほぼ同大の点刻を密にもち、中央後半部に疎に小点刻をもち、時にそこにたて長の無点刻部をもつことがある。

小楯板：長さより幅広く、先端はにぶい。前胸背後縁部の点刻とほぼ同大の微小点刻を少数まばらにもつ。

翅鞘：粗大な点刻をふくむ10条の条溝がある。各間室はややふくらみ、時に後端部において強くふくらむ。肩部後方に不規則なしわ状の凹陥部をもつ。第1・3・5間室にはほぼ1列をなす粗大な点刻(条溝内点刻とほぼ

同大)があり、時に点刻の周囲が圧せられてしわ状を呈する。側片は基部で幅広く、後基節の後縁あたりまでたどれる。側縁隆起は後縁角あたりまでである。側縁膜は第1腹節の後縁あたりからはじまり、翅端をおおう。

尾節板：長さより幅広い。後縁は強くふちどられ、長毛を列生する。上面は、基部両側にくぼみをもつこともあり、粗大点刻をやや疎にそなえるが、中央部に無点刻部分をもつこともある。前尾節板は尾節板と同様の点刻をそなえる。

後胸下面：後胸板は、正中部にやや深いたてみぞを有する滑沢な中央楯部をのぞいて、粗大な点刻と長毛をそなえる。前縁中央は、中基節間に水平に突出し、その先端はにぶい。後胸前側板は波痕状に彫刻され、長毛をそなえる。

腹部：各腹節は中央は疎に両側はやや密に粗造な点刻を有し、ほぼ1列の直毛を列生する。第1~3腹節の両側はかどぼる。時に第2~3節はよわい。♀では腹端にやや密に長毛をそなえる。

脚：前脛節は2外歯をそなえ、♂♀ともに端方内側に1棘をそなえる。前跗節の内爪および中跗節の外爪は2裂する。各腿節は長毛をそなえるが、時に後腿節ではほとんどこれを欠く。

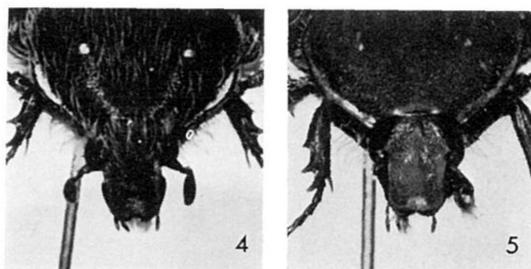


Fig. 4 *Oxyctonia jucunda* Fig. 5 *O. forticula*



Fig. 6 *Oxyctonia jucunda*

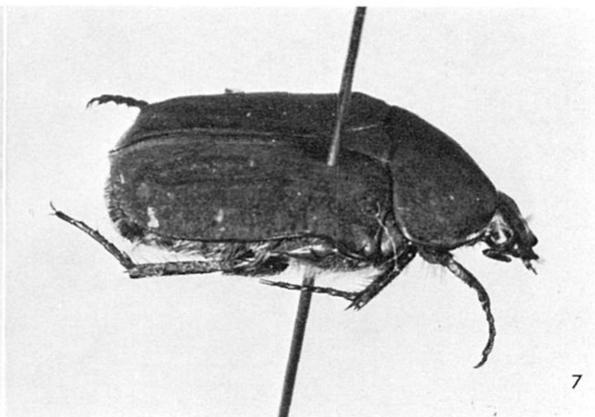


Fig. 7 *O. forticula*



Fig. 8 *Oxycetonia jucunda*



Fig. 9 *O. forticula*

色彩：♂♀で色彩を異にする。♂、黄赤褐色で、緑～紫色の金属光沢をもつ。頭部・前胸背の中央両側・小楯板およびその周辺部・翅鞘会合部および周縁・中胸板・後胸板の中央部・脛腿節の接合部・跗節は黒色。時に濃色部を全く欠いて、全体が黄赤褐色となる個体もある。♀、黒褐色で、頭部・前胸背・尾節板および後肢は強い緑色金属光沢をもつ。翅鞘のさかさ八の字形のふとい紋は茶褐色。各跗節・前中脛節・触角・口肢は赤褐色で紫金色の金属光沢をもつ。本種は♂♀ともに色彩の変異が多いようである。

体長：♂約9mm，♀約11mm

2. 対馬の *Oxycetonia*

日本に産するコアオハナムグリ属 *Oxycetonia* には、コアオハナムグリ *O. jucunda* (FALDERMANN) とアオヒメハナムグリ *O. forticula* (JANSON) の2種があるとされている。この両者のあつかい方については、*forticula* を *jucunda* の亜種とする考え方もあり、また、*jucunda*, *forticula* をそれぞれ独立種とし、さらに *jucunda* にいくつかの亜種を設定する考え方もある。この点についての見解は後日にゆずるとして、今回は、*O. jucunda* と *O. forticula* を別種とみなして論じてみたい。

両者の区別については、一般に体色（特に下面の）の相違、白紋（特に中胸側板の）の有無、中胸突起の形状などの形質が用いられている。これらは識別点としてある程度便利ではあるが、多数の個体を検してみるとかなり不安定なものであることがわかる。筆者は約1000頭の個体を被検した結果、両種の識別点としては、①頭楯の彫刻の状態、②翅鞘会合線に沿う隆起、③中胸側板の白紋の有無の三要素を組み合わせる方法が良いと考えるにいたった。つぎに両種の相違を記してみる。

このような特徴に基いて両種を区別してみると、対馬

	<i>Oxycetonia jucunda</i>	<i>O. forticula</i>
①頭楯の彫刻	弯入部を中心にして、同心円状に、しわまたは微細ないぼ状突起をよそおう。側縁部はしわ状になる事が多い。(図4)	弯入部付近は、微小な点刻でおおわれる。側縁部は長形の点刻で虫喰状になることもあるが、しわ状にはならない。(図5)
②翅鞘会合線に沿う隆起の稜	一般にその稜はにぶく、翅端より基方にむかってのび、翅鞘のはほぼ半分より手前で終わる。(会合線の両側に並ぶ2対の白紋のほぼ中間かその手前にまでのびる)(図6)	稜はすどく、特に末端は強大になることが多い。翅鞘の半分よりさらに基方にのびる。(2対の白紋のうち基方の白紋にまではぼ達する)(図7)
③中胸側板の白紋	左右に各1白紋をそなえる。(稀に左右のいずれか、または両方を欠くことがある)(図8)	白紋を全く欠く。(図9)

(長崎県)の *Oxycetonia* は2種あることがわかった。そこで対馬より *O. forticula* を新記録として報告しておく。

Oxycetonia forticula (JANSON)

アオヒメハナムグリ

1♀，長崎県対馬，1959，Ⅹ，3，藤岡知夫採集(図10) 標本は筆者保管(市川敏之氏より恵与)

この個体は上面・下面とも深緑色で、上面の白紋の発達は悪く、翅鞘会合線に沿う2対の白紋はかろうじて認められる。会合線に沿う隆起の稜はやや発達が悪く、右翅鞘の隆起の稜は基方の白紋の位置までとどいているが、左翅鞘のそれはやや手前で終わっている。中胸側板の白紋は欠いている。体長13.5mm。

筆者の所蔵標本の中で、*O. forticula* と認められるものは、本州南部(和歌山県)・四国(高知県柏島、徳島県板野郡大山村)・九州(鹿児島県佐多岬、下こしき島、大

隅諸島の黒島、トカラ諸島の中之島、奄美大島)・沖縄県(沖縄本島)の各地の標本がある。今回の長崎県対馬の個体は北限を示す標本である。

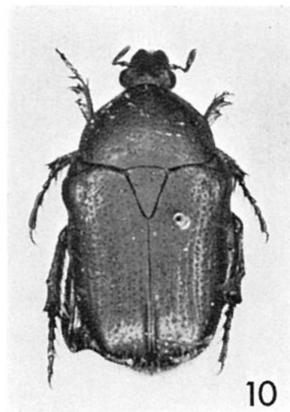


Fig. 10 *Oxycetonia forticula* (対馬産)

付記：本稿を草するにあたり、標本を恵与された方々に対し、深い感謝の意を表わしたい。